

# 「悪魔の名に拠りて」 エイハブのハルマゲドン

谷 本 泰 三

はじめに

先に論集『文学における差別』でハーマン・メルヴィル（Herman Melville）を取り上げた小論を試みた。<sup>1)</sup>それは作品に内在する本質を考察の対象にしたものではなく、ピップとクイクエッグに焦点を当てて差別問題を考えてみたものである。ピップは奴隷制度下のアメリカ南部州アラバマ出身で黒人奴隷の子、さらに加えての知的障碍。クイクエッグは地図にも出ていない南洋の小さい島から来た男で、全身に隈無く奇妙なデザインの刺青を施した、英語もろくに理解できない人物。彼は文化的にはアメリカ社会とは最も遠い距離に位置しているのである。登場人物中、社会的に最も差別される条件にあるはずの兩人だが、本人たちには被差別者意識は全くない。ところが、絶対の権力を行使できるはずのピークオッド号の船長エイハブこそが作品中最も強く激しい被差別者意識に取り憑かれている人物なのだ。船長エイハブが試みるモウビ・ディックとの闘いは、彼の被差別者意識に根差したものである。『モウビ・ディック』に表れた差別問題を考察する際にエイハブを除外することは出来ない。勿論のことである。エイハブの闘いの

---

キーワード：イエス・キリスト，ハルマゲドン，ノアの洪水，バベルの塔，語り手イシュミアル

意味を、旧約聖書のノア洪水の物語を背景とすることによって確認しようとする本論文では、とりあえずは、エイハブの闘いを誘発することとなる彼の被差別者意識を取り上げることから始めるのが、先の論述との前後関係からして、有効で妥当であろう。

ところで、先の論文で取り上げたシュミアルとピップ・クイクエッグとの関係について、一言述べておかなければならないことがある。そこには、エイハブを語るイシュミアルの語り手としての資質を問うこととなる問題があるからである。『モウビ・ディック』は、語り手の極めて個人的な体験物語なのだ。満身に英語が出来ないクイクエッグが、長々と哲学や宇宙の真理について英語で語れるはずはない。当然のことである。作品で示されるクイクエッグの思想はイシュミアルのクイクエッグ解釈なのだ。言い換えればそれは、イシュミアルが、クイクエッグによって与えられた啓示の内容なのだ。啓示による開眼、それは、『モウビ・ディック』がすぐれて宗教性に富む作品となっていることの一要因である。

ここで取り上げようとするエイハブ論についても同断である。エイハブの被差別者意識、と言ってはみたが、それは観察者である語り手の一方的な解釈なのだ。イシュミアルの語りの非合理性の数々は枚挙にいとまがない。このことは多くの読者が等しく認めるところであろう。語り手はエイハブの個室の中での言動を詳細に報告する。さらに、この物語の特徴であるエイハブの独白の数々。そして、イシュミアルはエイハブのプライバシーの核心である心の中にまで入りこむ。エイハブの行動の奥にある心情や、彼の思想など、それは、イシュミアルのエイハブ体験として読まれるべき性質のものなのである。極めて巧みなstory tellerイシュミアルが、語るにつれて織りなしてゆくフィクションなのだ。事実であるように見せかけながらするイシュミアルの語りだが、それは事実を記録したものではない。イシュミアルがする物語の中心人物エイハブの言動は、語り手本人の内的体験の発露なのである。メルヴィル得意の撞着語法でゆくと、読者に開示されるのは事実の記録ではないが、しかし、語り手の体験という事実の記録であるのだ。

イシュミアルが語るエイハブはモウビ・ディックに片足を取られて以来、この怪獣を「人知では計りしれない邪悪さ[inscrutable malice]」(164)<sup>2)</sup>が動かしている「残忍非道なる力[outrageous strength]」(164)と見て、これを抹殺することに執念を燃やすのだ。彼に屈辱の敗北をもたらし、障害者にしてしまった怪獣に対する彼の恨みは、高じて、絶対者に対する抗議となる。彼の狙いは非道なる絶対者たる支配者を打倒する、という宇宙支配の思想から出たものであった。宇宙の根源を成すとエイハブが考える悪を抹殺し、死に死を与えると言うのである。大洪水をもたらして地上の全てを壊滅させたヤハウエに対する、ハルマゲドンの闘いを挑む英雄が浮かび上がることとなる。ここでは、ノアの箱船とピークオッド号との比較対照作業も必要となるであろう。

本論はエイハブの戦いの意味を再確認することを目的とすると共に、語っていることの預言的性格を意識していないイシュミアルが、語るというミッションを与えられた事の意味を検討してみる。そうすることによって、著者メルヴィルが繰り広げる大きい織物の中で、語り手が意識していないメルヴィルの真理が陰のごとく現れてくると思うのである。

## 1 悲しみの人エイハブ

アメリカ文学作品には多くの障害者が重要な役割を演じている。身体上の障害とそれに付随する差別問題がリアルに、また象徴的に提示されている。ホーソン (Nathaniel Hawthorne) は「あざ」(“The Birthmark”) で、美しい女性の頬に浮かび上がる小さい赤いあざを鮮烈に描き出す。優れた科学者である彼女の夫は、これを不完全性を象徴する瑕瑾であるとして、全身全霊を傾けて除去しようとするのだ。『緋文字』(The Scarlet Letter) のヘスター・プリンも障害者群像の一人であろう。彼女は生涯取り外すことを許されない屈辱と罪の印として、緋色の文字 A を胸に着けさせられているのだ。フラナリー・オカナー (Flannery O'Connor) の作品群に登場する多くの障害

者のことも思い出される。アメリカの想像力は著名な障害者たちを産み出してきた。そして、彼らが登場する作品の中心課題は、すべて存在論的(ontological)な問題と切り離すことが出来ないのである。中でもメルヴィルが創り上げた執念の男、そして、ピークオッド号の船主が「神を神と思わぬ神の如き壮大なる男[a grand, ungodly, god-like man]」(79)と見なす人物は、存在論的問題に正面から立ち向かう英雄なのだ。そして彼は、アメリカ文学史上最も巨大なる障害者なのだ。エイハブ船長である。

長身で贅肉をそぎ落としたがっしりした体格、老人ではあっても体の不調は全く見せない。イシュミアルが船長を初めてみたときの印象である。彼はエイハブの頭から頬、そして首を伝って衣服の中に消える青白い、鞭のような「しるし[mark]」(123)、に目を留める。イシュミアルはエイハブを「稲妻[lightening]」(123)に打たれて垂直に梢から幹を伝って大地に消えるすじを残して、なおがっしりと聳えている大樹のようだ、と言う。まるで神から懲罰を受けなお毅然として立つミルトン(John Milton)のセイタンである。稲妻は神の懲罰としてキリスト教伝説に現れるイメージである。イシュミアルはエイハブのこの障害を最初に見たときの印象として、それを「mark(しるし)」(123)だという。「痣」という意味にもとれる注目すべき語り手の用語選択である。以後彼はこれを「烙印された[branded]」(123 *passim*)しるしと言う。更に注目すべきは、あれは「頭のとっぺんから足の裏まで続く生来の痣[a birth-mark]だ」(124)と言い切る老水夫の証言を紹介している。読者はホーソンの同名のタイトルによる短編作品の、象徴的意味をすぐに思い出す。美しい女性の頬にある小さいbirthmarkを彼女の夫は、腐敗と死を暗示する罪の象徴と見るのだ。

エイハブは、己が身に焼き付けられた傷痕を天上から加えられたもの、と見なし、そのことを深刻に受け止めている。極めて霊的・宗教的な問題として捉えているのだ。ピークオッド号が激しい雷雨に見舞われたとき、彼はかつて稲妻に対して「秘跡の儀式[the sacramental act]」(507)を執行していたことを思い出す。その時に礼拝の対象としていた稲妻に直撃され、それで

出来た火傷だと言う。そして、いまピークオッド号を襲う雷雨に向かって叫ぶ。「汝への正しい礼拝の仕方、それは汝に挑戦することだと悟ったぞ」(500) そして言う。「愛。畏敬の念。いずれに対しても汝は冷ややか。憎悪に対してさえも汝は殺害をもってしか応えない。そして全ては殺害されるのだ。[To neither love nor reverence wilt thou be kind; and e'en for hate thou canst but kill; and all are killed.】(507) エイハブは自分の身体に付いた特徴を「火傷の痕[the scar】(507) だと言う。彼は「烙印された」「しるし」だとか「生来の痣」など、イシュミアルが選ぶ言葉は一切使わない。注目すべき事である。エイハブは神に対する反逆者、罪びとと定められた者、というニュアンスを避けたのだ。イシュミアルとはきわめて対照的なエイハブの姿勢である。

エイハブの被害者意識は顕著である。それは被差別者意識へと繋がり、ピップやクイークエッグが受ける社会的・人種的差別とはまったく次元を異にする差別問題へと拡大され深化される。差別するのは神であると見ているのだ。それは、冷酷無情なる独裁者天帝が彼に加えたいわれなき差別だということになる。エイハブが最も鋭く自己の障害を意識するのは、抹香鯨に食いちぎられて失った脚である。ピークオッド号の甲板に屹立するのは、抹香鯨の顎の骨で作った義足を持つ英雄なのだ。不自由な体を支えて踏ん張るたびに、無念骨髓に達する想いと敵意を込めて、鯨の顎の骨を踏みつけているイメージである。

ピークオッド号出航の数日前の夜、エイハブは失神して道ばたに倒れていた。原因はあの義足なのだ。「それは訳の分からない、一見、説明の付けようのないそして想像さえも出来ない偶発事故によって、あの鯨骨の義足が激しくはずれ、内股の付け根を刺し貫いたかと思われる激しい打撃を与えたのだ。」(463) ここでイシュミアルが口にする何気ない言葉「一見[seemingly】だが、メルヴィルが語り手に託したこの語の意味は深い。「偶発事故」のようでありながら超越的存在者の意志が、かすかながらこの語によって暗示されているのである。

エイハブはその痛手から立ち直ることが出来ない。この事件は、トラウマとなって彼の狂的な執念へと凝結する。そしてエイハブは、それに普遍的な意味を付与してしまうのだ。おおよそ現存する苦しみのすべては、過去の悲痛な出来事が尾を引いていて、それが直接の原因となっていると考えるに至るのである。それだけではない。苦難についてのエイハブの想いは更に深まる。人の幸せや楽しさは、すべて遂には大きい痛みや悲しみにとって代わられるものとしてある。これがエイハブの胸中に沈潜している思いだ、とイシュミアルは言う。そして、それは、「消去する事の出来ないものとして人の額に刻印された悲しみのしるしなのだ [The ineffaceable, sad birth-mark in the brow of man]」(464) とエイハブは思うようになった。イシュミアルの結論である。

宇宙の根底を形成しているのは死である。これがエイハブのエコロジーだ。母親達が、貪欲な口を広げている海底まで行って、傍らにわが身を横たえてやりたいと切望する息子達の骨。火炎に包まれた船から、歓喜して待ち受ける海へ、ひしと抱き合って飛び込んだ恋人達。エイハブは切々たる口調で死者達の死にざまを列挙する。人が未だ見たこともない深海に潜り込んだ鯨の頭がそこに見たもの、それは、「何百万という死者の骨をバラストにした、世界という戦艦だ」(311) とエイハブは言う。愛する者たちを失った人びとの悲しみを自らの悲しみとするエイハブである。

イライジャ（旧約聖書「列王記上」の預言者エリヤ）と名乗る人物がピークオッド号で上船手続きを終えたイシュミアルとクイークエッグに語りかける。彼は「靈魂を持っていない連中の中であって、彼等に代わって、その欠落を埋め合わせるに十分の偉大なる靈魂の持ち主」それがエイハブだ、(92) と言う。イシュミアルが未だ見ぬ船長について得た情報である。出航して数日が経って遂にエイハブが姿を現す。彼は「イエスの十字架像を顔面に浮かべて [with a crucifixion in his face]」 「大いなる苦難を背負った王者」(124) のように立っていたのだ。エイハブが初めてピークオッド号乗員達の前に姿を現したときのイシュミアルの印象である。モウビ・ディックに止めの一撃

を与えるべく出撃するエイハブがボートに乗り込み、母船ピークオッド号に残るスターバックと別れの握手を交わすとき、彼を押し止めようとしてスターバックは「心の気高き人よ」と呼びかけている。イシュミアルは、エイハブに、悲しみの人、苦難の人イエスのイメージを見ているのである。

エイハブの個人的な恨みは耐え難い苦しみへと深まり、それは虐げられた弱い者への同情へと広がる。イエスがしたように老人エイハブは、差別されている者を哀れみ、親近感を抱き、その者たちと連帯しようとする。船員達からあざけられる哀れな黒人少年ピップを庇護してやろうと努める。自分の部屋を彼の避難場所として提供してやる優しさを持つ。エイハブが、黒人でしかも知的障害を持つピップに強く惹かれるのも道理である。幼児のようにちっぽけで全く無力なピップは、既成秩序の中では、一個の人格を保持することを許されないからなのだ。既成の秩序、それが捕鯨業界のしきたりであろうと、ナンタケットのコミュニティを律するものでであろうと、宇宙の定めであろうと、すべてエイハブが峻拒するものなのだ。ピップを産み出した社会的、人種的、文化的、その他諸々の、人間の歪んだあり方を在らしめた諸悪の根元、と彼が見定めている神への怨念と憎悪の感情に取り憑かれたエイハブである。哀れなピップの傍らで彼は天に向かって叫ぶ。「心なき凍りついた天よ、汝はこの薄幸なる子を産み、そして棄てたのだ。勝手気ままな創り主よ、この子を見よ!」(522)しかし弱小者への憐憫と愛の感情は、彼の恨みと憎悪の念にのみ込まれてしまうこととなるのである。ひたすら罪びとを哀れみ、病める人たちのそばに立ち、神に赦しと癒しを祈願した愛の人イエスとの決定的な相違点である。

モウビ・ディックが遊弋していそうな場所を探し当てるべく、エイハブは深夜、一人で海図を眺め、「そのまま固く手を握りしめ寝てしまうが、目覚めて両の掌に血染めの爪が食い込んでいるのに気付く。[He sleeps with clenched hands; and wakes with his own bloody nails in his palms.]」(201)十字架上のイエスの姿とエイハブとを重ねるイシュミアルの記述である。しかし、イシュミアルが描き出すのは、人類を救済するための愛の行為としての

イエスの十字架ではなく、ただ憎しみと怨念に取り憑かれた男の姿である。

イエスとエイハブとの間にある落差がはっきりと示される場面を見てみよう。食事のシーンである。福音書の記述から見えてくるのは、大勢で賑やかに食事をするイエスの様子である。（「マタイによる福音書」9：10，「マルコによる福音書」2：15，「ルカによる福音書」5：29）イエスに敵対する者たちは彼のことを、顔を顰めて「大食漢で大酒のみ」（「マタイによる福音書」11：19，「ルカによる福音書」7：34，）<sup>3)</sup>とさげすんでいる。イエスは好んで宴会に顔を出す。それは、くつろいだ姿勢での談笑の場であったと想像される。そこは、世間から罪びととされている人たちが、遠慮なくイエスと親しく語り合うことが許される場であった。<sup>4)</sup> イエスとの会食の場と極めて対照的なのが、ピークオッド号上での食事のシーンである。エイハブと共に食事をしてしなければならない上級乗組員達は、まるで帝王の前に連れてこられた児童のように身を縮めて座っている。彼らは言葉を発することも出来ず、顎の蝶番が音を立てるのではないかと心配し、無言の船長の前で恐れおののきながら食事をするのだ。

イエスは、虐げられた者、罪人とさげすまれた者、彼を憎み殺害しようとし、その計画を残酷な仕方で行った者、それら全てを救済すべく、自己を犠牲にした。福音書の記者達が記すところである。メルヴィルの英雄エイハブは、差別する神への恨みを晴らすために天と地の秩序を覆す闘いに挑む。遂にはピークオッド号の全乗組員を道連れにして、怒りの太平洋の深みへと姿を没する。虐げられ、苦しむ者を哀れむ心のエイハブである。しかし、人類救済を志向する彼の姿には、時にはイエスと重なるイメージが漂うことがあっても、「十字架の死に至るまで従順で」（「フィリピの信徒への手紙」2：8）あったとされるイエスと、自らを神格化して目的を達成しようとするエイハブとは本質的には似て非なる両者なのである。



## II ハイジャック犯エイハブ

語り手イシュミアルは捕獲した鯨を処理するシーンを描く。「切りこみ [Cutting In]」と題された第67章である。その光景のすさまじさに読者は息をのむ思いで臨場感を味わう。ピークオッド号の甲板は屠殺場へと一変する。血まみれの乗員が総出で修羅の巷を右往左往する。巨獣は、一群の巨大な滑車によってオレンジの皮を剥くようにぐるぐると回転しながら、その脂肪皮を剥ぎ取られてゆく。血しぶきと、巨大な肉塊と、奇妙な器具や刃物が交錯し、ぶつかり合い、その騒音と、殺気立った作業員達の叫び声が混ざり合い反響する。

全員総出の作業に総司令であるエイハブの姿は見えない。ナンタケットの市場に鯨油を持ち帰ることなど、エイハブにしてみれば、どうでもよいことなのだ。彼が姿を見せるのは全ての作業が終わり、甲板に静寂が戻ってからのことである。エイハブが目的とするのは、経済的な利潤を得ることではない。この乗組員総出の屠殺場面で、最高指揮者であるエイハブが全く姿を見せないのは、納得のいく筋立てである。宇宙を支配している条理、これを廃絶すること。これがエイハブの航海の目的なのだ。イシュミアルが観ている「同胞、同族、同種の者同士が到る所で行っている共喰い[the universal cannibalism]」（274）による悪循環的エコロジーを超克すること。これが執念となって、エイハブはその目標に向かって一途に突っ走るのである。エイハブは宇宙の根源を悪であると信じる。これを抹殺すべく奮い立った革命の英雄がエイハブなのだ。

巨万の富をもたらす見込みのある捕鯨業だ。しかしエイハブの狙いは宇宙支配の思想から出たものであった。宇宙の根源を成す「残忍非道なる力」を除去し、「計り知れない邪悪」なる者を抹殺することに執念を燃やす。彼は、「アダムを始祖とする、彼が属する人類の全ての怒りと憎しみをこめて[the sum of all the general rage and hate felt by his whole race from Adam down]」（184）宇宙の根源を成すと彼が考える悪を抹殺し、モウビ・ディックが体現

する悪と死に死を与えると言うのである。

エイハブはモウビ・ディックを悪の権化と見ている。しかし、語り手イシュミアルはエイハブの見方に同意しない。彼はこの伝説的怪獣、白い抹香鯨を重層的に意味付けようとするのである。そもそも抹香鯨は、ニューイングランド地方のほぼ全家庭の灯火の原料である鯨油を供給していたのだ。ところが、イシュミアルは抹香鯨を「レビアタン[Leviathan]」(x *passim*)と呼ぶ。混沌、暗闇、等、無秩序の象徴的存在として旧約聖書に登場する怪獣の名である。こうしてイシュミアルは光・秩序に対する闇・混沌の図式を示すのである。抹香鯨は英語でsperm whaleだ。生命を伝達するspermと、死をもたらすものとしてのエイハブのモウビ・ディック。イシュミアルは更に多義的で重層的な図式を提示するのである。見てみよう。

捕鯨業のさまざまについて陸の御仁は、全く無知だ、とイシュミアルは言う。白い巨鯨の話聞いても信じようとはしないだろうと言い、言葉を続けて、彼等はこれを、奇っ怪にして莫迦でかい作り話だと思うか、もっとひどいことに、「醜悪にして我慢のならないたとえ話 [a hideous and intorerable allegory]」(205)だと鼻であしらうだろうと言う。やがて読者は、捕鯨の同業者の中にもほぼ同じような考えがあることを知らされる。ピークオッド号が太平洋上で出会ったフランスの捕鯨船「薔薇のつぼみ号」の船長にエイハブがモウビ・ディックについての情報を求めると「白鯨なんて聞いたことがない。[Never heard of such a whale. Cachalot Blanche! White Whale -- no.]」そして、また別のナンタケットの捕鯨船の船長は「耳にしたことはあるが、そんなものが居るなんて信じちゃおらん。[No; only heard of him; but don't believe in him at all,]」(494)と言う。「我慢のならないたとえ話 (intorerable allegory)」と片づけてしまう陸の御仁たちの意見や、白い巨鯨について全く関心を示さない捕鯨仲間の姿勢に注目してみよう。この二語には三つに重なるアイロニーが仕掛けられているようだ。陸の人たちには「おとぎ話」や「たとえ話」と取られている白い怪獣だが、エイハブにはモウビ・ディックは抜き差しならぬrealityなのだ。陸の連中の無知、それは我慢

のならぬ (intorerable) 事なのだ。だが、モウビ・ディックを邪悪なるもの (malice) と決めつける、つまり allegorize してしまい、「妥協を許さぬ (intorerable)」エイハブの姿勢は、語り手イシュミアルにとっては、それこそ「我慢のならない (intorerable)」事ということになるだろう。ここに見るのは陸の御仁の無知と、事の両面を見ることの出来ないエイハブの悲劇的欠陥である。イシュミアルの重層的視力は、それらを浮き彫りにして対比する。語り手イシュミアルの巧みな三重のアイロニーである。

さて、エイハブの目に映るのは不正が横行し、正しい者が報われずかえって苦しみを味わうという矛盾だらけの世界だ。この非道を正すには、専制君主、王たる神が支配する宇宙の、その仕組みそのものを変革するより他無し、とエイハブは結論するのである。宇宙全体のシステムを、すっくり入れ換えてしまおうというのである。エイハブの全体論的エコロジー (holistic ecology) は自己の実存的生命を賭けた戦いへと彼を駆り立てる。それは、宇宙を支配する絶対者に対する挑戦であったのだ。それは次のような大胆なことばで表すことが出来るだろう。「絶対者よ、お前が死ぬか、わしが死ぬかだ。」彼は革命の英雄だ。しかし、エイハブの行為は旧約聖書の預言者が戒めるところを地で行くことなのだ。預言者は言う。「災いだ、土の器のかけらにすぎないのに自分の造り主と争う者は。粘土が陶工に言うだろうか『何をしているのかあなたの作ったものにとっ手が無い』などと。」(「イザヤ書」45:9) そして、革命児エイハブは敗北する。

「知れ。神がわたしに非道なふるまいをしわたしの周囲に砦を巡らしていることを。だから、不法だと叫んでも答えはなく救いを求めても、裁いてもらえないのだ。神はわたしの路をふさいで通らせず行く手に暗黒を置かれた。わたしの名誉を奪い頭から冠を取り去られた。四方から攻められてわたしは消え去る。木であるかのように希望は根こそぎにされてしまった。神はわたしに向かって怒りを燃やしわたしを敵とされる。」(「ヨブ記」19:6-11) 徹底的に神と議論することを求め、苦難の所以を説明せよと神に迫るヨブの台詞である。わが身に降りかかったいわれのない苦難に抗議の声を上げる旧約

聖書の英雄ヨブの姿はそのままエイハブのものかと思わせる。

だが、エイハブはヨブが求める手段とは異なる仕方で決着を付けようとする。ハイジャックである。最新の装備を施した捕鯨船を奪取して、乗員もろとも敵に自爆的攻撃をかけ、これを撃滅しようという魂胆である。古い世界の破滅を狙ってするエイハブ船長の試みは、ハルマゲドン戦争なのだ。ユルゲン・モルトマンが言う「黙示論的テロリズム」に他ならない。<sup>5)</sup> ピークオッド号をハイジャックしたエイハブは、乗員を人質にして敵対する者を強請ることはしない。相手は妥協案に応ずるような敵ではないのだ。彼は乗員達を洗脳し、ハルマゲドン戦争への協力者に改宗してしまうのである。

ピークオッド号を本来の目的とは全く異なる方向に進めることと、その固い決意を告げられた一等航海士スターバックは、母港ナンタケットの市場に鯨油を供給するのが、ピークオッド号に与えられた仕事であるとして、船長の狙いの違法性を指摘し、さらに神を神とも思わぬ行為だと説き改心を迫る。ピークオッド号建造のための出資者達の多くはナンタケット在住の貧しい人たちである。公的年金の受給者や、法的被保護者が、わずかの金を出し合っ  
て船体に打ち込まれた数本の釘とか、その釘が止めている一枚の板などの費用に使われているのだ。彼らはその出資額に応じて、僅かばかり配当金を捕鯨の収穫から払い戻してもらおうという仕組みだ。ハルマゲドンを挑むエイハブはこのシステムを無視して、ハイジャックを敢行する。

エイハブは時には、白鯨は仮面に過ぎず、その奥には何も無いかも知れないという虚無思想に囚われることがある(162)。だが、今となっては後に引けぬ。「わたしの靈魂は、鉄路の上を、運命が定めた目標めがけて突っ走  
るのだ」(168) それで「私は空気のように自由になりたいのだ [I would be free as air]」(468) と叫んで自殺攻撃へと突っ込むハイジャッカーエイハブである。先にエイハブが眠っていて、掌に自分の爪を食い込ませて血染めに  
してしまう場面を見てきたが、ここでこの場面をある批評家と一緒にもう一度振り返って見てみよう。「彼はそのまま固く手を握りしめ寝てしまうが、目覚めて両の掌に血染めの爪が食い込んでいるのに気付く。 [He sleeps with

clenched hands; and wakes with his own bloody nails in his palms.]] (201) イシュミアルの描写である。この批評家はnailsにかけたイシュミアルの地口に注目する。エイハブに見る十字架像だ。しかしイエスとの違いははっきりしている。人類救済のために掌に釘を打たれたイエスの場合は犠牲行為。憎悪の念に駆られて、自分の爪で血を流すエイハブの場合は自殺行為なのだ。<sup>6)</sup> エイハブの自殺攻撃は大きい損失を招来することとなる。最新鋭の捕鯨船と世界各地から集めた乗員の生命が大海の藻屑となるのである。

### III エイハブの自爆

「死衣を纏った大海は五千年前のおりに、うねっていた。[the great shroud of the sea rolled on as it rolled five thousand years ago.]] (572) 世界各地から集められた水夫達を乗組員とするエイハブ船長の捕鯨船ピークオッド号を呑み込んだ海の描写である。「五千年前」の海、それはノアの洪水に覆われた地球なのだ。<sup>7)</sup> 語り手イシュミアルは自分が漂っていた海と「五千年前」の海とを比較しているのではない。彼は人類を壊滅させたあの洪水に身を任せていたのだという実感を込めて長大な物語を終えているのである。彼は海が巨大な死そのもの (the great shroud of the sea) (572) だったと言う。イシュミアルは物語がまだ半ばに達していない第35章で、早々と海とノア洪水とを同一視して表明している。洪水以来限りない災害を人に加えてきた海は、全世界を滅亡させたあの同じ水を湛えているのだと言い、それは人が最初の船を浮かべたあの海なのだと言う。そして結論する。「そう、死すべきもの共、愚かな人間共よ、ノアの洪水はまだ水を引いていない。それは、地球の三分の二を覆っているのだぞ。[Yea, foolish mortals, Noah's flood is not yet subsided; two thirds of the fair world it yet covers.]] (273)

ここで「創世記」のノア洪水物語を見てみよう。イシュミアルに託したメルヴィルの意図がそこに読みとれると思うのである。人が墮落しその「心に思い計ること」は「常に悪いことばかり」(「創世記6：5-6」) という状況

を見て神ヤハウエは心を痛め、人を造ったことを後悔する、というところから洪水の物語は始まる。人が「心に思い計ること」という新共同訳聖書の日本語訳だが、ゲルハルト・フォン・ラートは、ヘブライ語のテキストではこれを人の「心が形作るもの」という意味と捉える。それでラートは、「人間の幻想の反映や湧き上がり自由に形を変える情動さえ、『常に悪いことばかり』なのである」と解する。そしてラートはここに「苦悩、悲しみ、人間への幻滅」に悩むヤハウエの心を観るのである。<sup>8)</sup>

創世記の語り手は引き続いてヤハウエの言葉を記す。「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。」(「創世記」6：7-8)そしてヤハウエはノアに箱船を造るよう命ずる。イシュミアルが言う「人が浮べた最初の船」(273)である。ノアが命に従って彼の家族と全ての動物を一番ずつ、箱船に入れるのを見届けたヤハウエは自ら箱船の扉を閉じる。そして、大洪水である。箱船以外地上にあるの生き物は絶滅した、という物語である。

ノアの洪水は「人類的大カタストロフィという壮大なドラマでえがいた『メモメント・モリ』である」とする大木英夫は、この物語が示すのは人間にとってはえたいのしれぬ自然と生との究極的違和だ、と言う。<sup>9)</sup>大木の言う「自然」とメルヴィルの白い巨鯨とを入れ替えると『モウビ・ディック』のテーマが見えてくる。ただし、メルヴィルは「創世記」の箱船が暗示する恩寵を用意しなかった。

エイハブの特質が一層明らかとなる事を期待して、洪水後の世界の始まりを「創世記」に辿ってみよう。洪水が引いて外に出たノアが祭壇を築き、その上に「焼き尽くす献げ物を」捧げたときヤハウエは心の中で言う。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。」(「創世記」8：21)「二度とすまい」が二度繰り返されて強調されていることに注目する大野恵正は、「創造の秩序の保持」を決意する神

を読み取っている。<sup>10)</sup> また、ラートは「本当なら神は毎日洪水を起こして人間を罰しなければならないだろう」と言うこの箇所についてのカルヴァンの意見を紹介しつつ、ヘブライ語原典を解釈する。ラートの読みでは「幼いときから悪いのだ」に続いて「にもかかわらず」と入れるようにも読めるとされる。そしてラートは言う「ここにノア以後の全人類に向けられた神の救済意志が驚嘆に値するほど直接的に明言されている限りにおいて、このヤハウエの言葉が、ヤハウエストの原初史全体に於ける大きな節目をなすことに疑問の余地はない。」<sup>11)</sup>

ヤハウエストである語り手がする物語のプロローグを思い出してみよう。語り手は言う。「主は地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を作ったことを後悔し、心を痛められた。」（「創世記」6：5-6）このプロローグと上に示した「二度とすまい」を二度繰返すエピローグ（「創世記」8：21）を並置してラートは更に言う。「物語のプロローグにおいては神が懲罰を決意する理由になったその同一の事態がこのエピローグでは神のみ恵みと寛容さを啓示するのである！ 神の罰しようとする怒りと神の絶えざる恵みの対立は、聖書全体を貫き通しているが、それがここではほとんど不相応とさえ言えるような仕方で、すなわち神がまるで人間の罪深さに譲歩し、それを受け入れたかのような形で表現されている。」<sup>12)</sup> 洪水物語の読者はここでノアの命名についてのエピソードを思い出すのである。ノアの父は「『主の呪いを受けた大地で働く我々の手の苦勞をこの子は慰めてくれるであろう』と言って、その子をノア（慰め）と名付けた。」（「創世記」5：29）英雄エイハブが見落としたというより、彼が見ようとしなかった恩寵の神の姿を描出すること。それが洪水物語のねらいなのである。

『モウビ・ディック』では、イシュミアルの語呂合わせも含めて、ノアへの言及や洪水のイメージが繰り返される。聖書に精通していたメルヴィルである。ノアに託された罪人への神の恩寵物語のリアルな描写を、彼は知らなかったと考えるのは極めて不自然であろう。読者は著者が創り上げた英雄を著

者と同一視する必要は全くないのだ。そして、メルヴィルの英雄が見ようとしなかった恩寵の神の姿を、素朴な筆致で見事に描写しているのが創世記のノア物語である。見ることを拒否したのは著者メルヴィルではない。それは英雄エイハブなのだ。

ノアの航海の結末とエイハブの終末には共に鳥が象徴的な役割を演じている。ノアは水が引き、地に平和が戻った事を確認すべく鳩を放つ。だがエイハブのピークオッド号は、「天を象徴する鳥 [the bird of heaven]」(572)を「大天使のごとき叫び声 [archiangelic shrieks]」(572)と共にそのマストに釘付けにして滅亡への道連れにする。イシュミアルがノア洪水を見たのはエイハブのピークオッド号の甲板からである。ピークオッド号、それは神の恩寵を受け止めるためのものとして建造された箱船とは本質的に異なるのだ。比べてみよう。ノアは神が命ずるままに、箱船を建造することとし、神が彼に示した設計図をそのままに、造り上げてゆく。これに反してピークオッド号は人間の知識と造船のノウハウの全てを駆使して造り上げた、19世紀のアメリカが持つ技術の結晶である。それは最新の航海技術で大西洋からインド洋、さらには東南アジアの島々の間をすり抜けて、ついに太平洋に出る事を可能とする船だ。洪水の上に浮かぶノアの箱船は、ピークオッド号のように人力によって航海するのではない。それはただひたすら風の吹くまま、波の赴くに任せたままである。最新のテクノロジーを駆使して科学、そして疑似科学までを動員してのエイハブのピークオッド号は、自然の風を利用して帆を操り逆進する技術をも備えているのだ。まるで自然の石の代わりにれんがを造ったり、アスファルトを造り上げたりしたバベルの人たち現代版である。エイハブのピークオッド号もバベルの塔も共に人力による天への挑戦を象徴している。ピークオッド号は自我の絶対化というエイハブの野望を実現するためのものである。バベル人の狙いは天に届こうとする事であった。そして、エイハブの狙いは天の秩序を覆すためのものだったのだ。

「創世記」には洪水の後に続く物語として、バベルに集まったノアの子孫の話が置かれている。洪水の後、ノアの子孫から分かれ出たとされる地上の



諸民族は、世界中で「同じ言葉を使って、おなじように話していた。東の方から移動してきた人々は、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは『石の代わりにれんがを作り、それをよく焼こう』と話し合った。しっくい代わりに、アスファルトを用いた。彼らは、『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』。(「創世記 11：1-4」)と言った。神はこれを見て彼らの言葉を混乱させる。彼らは相互間にコミュニケーションが出来なくなり、全地に散らされることとなる。エイハブ船長の捕鯨船ピークオッド号の乗組員は、世界各地から集められた水夫達で構成されている。彼らは生まれ故郷の孤島の如き者たちだ、とイシュミアルは言う。「孤独でばらばらに散らされ、自己という大陸にひきこもって孤立した者たち[isolatoes]」(121)が、エイハブを頭とする一本の竜骨の周りに集められているのだ。「島嶼から、地のはての各地 [all the isles of the sea, and all the ends of the earth]」(121)から集まり来たり、「連邦へと組織せられた[federated]」(121)者たちだ。バベルから全地に散らされた諸民族を糾合しピークオッド号上に再編成したかの如き図柄である。メルヴィルが政治用語federatedを使っているのは興味深いところだ。ばらばらに孤立していた13植民地が連合して作った連邦政府を思い出す読者もいるだろう。更に、ミルトンが『失樂園』(Paradise Lost)で描くセイタンとその軍勢、といったところでもある。悪魔的形相の指揮者は彼ら連邦軍を従えて乾坤一擲の戦を白い巨鯨に挑む。これが『モウビ・ディック』の図式である。

人が造った二番目の建造物バベルの塔は「石の代わりにれんがを作り」しっくいの代わりに、アスファルトを用いたものであった。驚くべき科学技術である。それを駆使して彼らが目論んだのは「天まで届く」事であった。つまり人間の神格化であった。樂園を追われたアダムの子孫が、やがて悪にまみれて神の怒りの洪水によって滅亡する。ところが神の恩寵によって洪水を生き延びたノアの子孫は「喉元過ぎれば熱さを忘れる」の喩えそのままに、先祖ノアに示された恩寵を忘れ、神の位置にとりつこうとする野望を抱いて

罰される。しかしレオ・ストラウスが言うように、人類がバベルから散りじりに四散させられたのは、洪水よりも緩やかな処罰であったのだろう。<sup>13)</sup> 恩寵の神は「この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。」(「創世記」8:21)とノアに心で誓った約束を守るのである。

エイハブにとっては、恩寵の神を認め、謙虚や宥和の精神に生きることは奴隷道徳に従うこととなる。宇宙の支配者に対するとき、エイハブの内的憎悪と怒りは、青白い炎のように燃え、彼が作り上げる武器に移り移って表面化する。エイハブが数本の銛を撚りあわせ自分で鍛えあげた特製の銛の、その切っ先に装備する逆棘状のかかりがそれである。彼がピークオッド号の鍛冶職人に命じて造らせるかかりは、数本の剃刀を素材とした物なのだ。「わしの剃刀だ。最上の鋼で出来ている。これだ、これで氷の北極海に降る針の氷雨のようにシャープな逆棘かかりを造れ。」(489) ハワード・ヴィンセントの調査では当時の捕鯨船は、銛の先端に装備する逆棘かかりは、繰り返し研ぎなおして使えるようsoft steelを使用していた。<sup>14)</sup> 捕鯨のしきたりを無視する命令に躊躇する職人を叱りつけ督促して、エイハブは一度しか使用出来ない銛、しかもそれに焼きを入れるのに水ではなく異教徒達の血でもってするのだ。「わしには剃刀はもはや不要。もうひげを剃ることはないであろう。夕食もとらず、祈ることもないであろう。」(489) 必殺の武器を用意してこの一撃に命を賭けるエイハブの気概が読みとれる台詞だ。ノアの洪水の上を航海するピークオッド号は、当時としては最新のテクノロジーで装備され、加うるに非科学的呪術的手段を施したものである。危機の海に浮かんだ、神の恩寵を表す箱船ではない。それはむしろ、人が二番目に構築したあの建造物バベルの塔の再現だ。恐るべきことに、バベルの人たちがしたことが天に届くためであったのと違い、ピークオッド号を操るエイハブは天的存在を抹殺しようとしているのだ。そして、反逆児エイハブは巨大なモウビ・ディックにはりついたまま、いわば自爆死を遂げるのである。

## むすび—預言者イシュミアル

「吾、神の名に拠らず、悪魔の名に拠りて汝に洗礼を施す！[Ego non baptizo te in nomine patris, sed in nomine diaboli!]

 (489) エイハブがうなり声と共に吐き出す誓言である。こうして、エイハブが観る死と虚無としての宇宙の支配者に、とどめの一撃を加えるべく鍛えあげた逆棘かかりに血の洗礼を施すのだ。彼は客体的・外的諸事実に対して、主体が絶対君主として臨むことを主張して止まない。自己神格化に突き進む英雄はその悪魔的本質を露呈して、「洪水」の深淵へと沈んでゆく。

「創世記」の洪水はノア一家と彼が一對ずつ選んだ陸と空の生き物を除いて、全てを滅ぼす。巨大な破壊である。イシュミアルによれば、洪水はまだ引いていないのだ。「洪水」を武器として人類に攻撃をしかけた張本人を赦しておくことが出来ないエイハブは「悪魔の名に拠りて[in nomine diaboli]」殺す、と叫ぶ。悪を倒すためには、邪悪なるものの力を取り込む。これがエイハブの魂胆である。

洪水が象徴する人類の不安を体現した英雄、それがエイハブである。ここにノア物語に示された神話的体験が、再現されることとなる。<sup>15)</sup>メルヴィルは、人類の不安を象徴的に描く神話作家なのだ。だが、語るのはイシュミアルである。物語を締めくくる「エピログ」の頭にイシュミアルは「ヨブ記」からの言葉を引用する。「わたしはただひとりのがれて、あなたに告げるために来ました[And I only am escaped alone to tell thee.]]」(573)。ひたすらにエイハブ体験を語り続けたイシュミアルは、物語を締め括るにあたって、自分の役割が、ヨブの上に降りかかった大災害の様子を報告するこの召使のように、ただ告げるだけのものだ、と言わぬばかりである。モウビ・ディックを追撃しようとするエイハブのボートに乗り組んだのは運命の女神のなせる業。「たまたまそうなった[It so chanced...]]」(573)ので、私は単なる語り手に過ぎない。そこには取り分けて言うべき意味はない。たまたま唯一の生存者となったので、お話申し上げるだけのこと、と言うのである。しかし彼

の物語は「洪水物語」が示す普遍的な意味を再確認する作業であったのだ。「創世記」の物語はイシュミアルの語りによって現代に移し替えられ、普遍化されるのである。

『モウビ・ディック』の最終場面は死（洪水）が支配する世界である。最終場面をもう一度見てみよう。「死衣を纏った大海は五千年前のおりに、うねっていた[the great shroud of the sea rolled on as it rolled five thousand years ago.]」(572) 世界各地から集められた水夫達を乗組員とするエイハブ船長の捕鯨船ピークオッド号を呑み込んだ海の描写である。「五千年前」の海、それは大地を覆いつくした「創世記」の洪水のことだ。イシュミアルが生き残ったのは眼前に浮上してきた「救命浮具 [the life-bouy] (523) に縋り付いたからである。クイークエッグが船の大工に頼んで造らせた棺桶なのだ。クイークエッグが自分の体に彫り込まれた不思議ないれずみ模様を、この棺桶の蓋にコピーしたことを読者は思いだすのである。それは、宇宙の全てとその真理への道を形象文字で示したものだといシュミアルは言う(480-481)。生きた教典であったクイークエッグは、このようにして、やがて語り手となるイシュミアルをノアの洪水から救出する。クイークエッグに救われたイシュミアルは語り手、つまり預言者となって再生するのだ。こうしてクイークエッグは復活を象徴する事となる。クイークエッグの死はエイハブの死やピークオッド号の破滅とはその意義を根本的に異にする。クイークエッグの死は新しい命に繋がるのだ。イシュミアルはハルマゲドンの壊滅と死を象徴する地獄の洪水からクイークエッグの棺によって生還する。それは「たまたまそうなって[It so chanced]」て生き残り、語るという作業をするためではない。これがイシュミアルの認識である。鯨の数々の不思議や捕鯨に関する該博な知識を駆使しつつ、深く思索を巡らしてきた語り手は、哲学的思考を、ここで止めてしまうのだ。不可知論者イシュミアルの限界である。しかし、イシュミアルの「偶然」はメルヴィルの必然なのだ。不可知論者がする「偶然」の物語。それを語らせるのは、実は目的論者 (teleologist) である著者メルヴィルなのだ。

語るイシュミアルには、サミュエル・テラー・コールリッジの長編バラッド『老水夫行』の老水夫を思わせる所がある。不思議な航海を一人生き残ってその体験を語る老人だ。彼が繰り広げる非日常の世界に、聞き手は金縛りにあった三歳の童子のように引き込まれたという。老水夫が去った後この聞き手は「深く思索出来る人間 [A sadder and wiser man]」<sup>16)</sup> になった、と言うのが老水夫の語りを読者に伝える語り手の証言である。それは正にコールリッジの読者の体験なのである。この種の体験はイシュミアルの語りに接した読者のものでもあろう。語り手イシュミアルには、後に『ビリー・バッド』でサクラメント執行者・司祭としての役割を演ずるメルヴィルの姿勢がすでに窺える。別のところで論じておいたように、『モウビ・ディック』の著者メルヴィルは、読者をサクラメントへ招待する礼典執行者、つまり celebrant としての役割をこの時すでに意識していたと言えるであろう。<sup>17)</sup>

メルヴィルはピークオッド号上でサクラメントである洗礼執行者、つまり黒ミサを執り行う司祭としてのエイハブを描いた。そして、最終作品『ビリー・バッド』は全編を通し宗教儀式でいう所作を思わせる作品である。それは、言葉を越えた彼方にある実在を伝えるための、儀式なのだ。『モウビ・ディック』を書き上げたとき、預言者としての自分を強く意識していたメルヴィルは、『ビリー・バッド』では恩寵のサクラメントを執行する司祭としての役割を果たす。メルヴィルは、神父や牧師がするようにパンと葡萄酒を物的素材 (elements) としてサクラメントを執行することはない。作家であるメルヴィルは作品を物的素材とするサクラメントに読者を招待し、和解へのサクラメント執行者として、司祭の役割を演じて生涯を終えるのである。

エイハブの神義論的設問は、不可知論者イシュミアルを語り手とする『モウビ・ディック』において、ついに結論を得ることはない。予言者イシュミアルを創造した著者が『ビリー・バッド』において恩寵のサクラメントを執行する司祭的役割を演ずる語り手を創造するまで40年の歳月を要した。言い換えれば『モウビ・ディック』を始めとしてそれ以後神義論 (theodicy) 的論争を、「ヨブ記」のヒーローがするように、執拗に神に挑みつつ繰り返し

たメルヴィルが、遂に救済論 (soteriology) 的結論に達するまで40年の歳月を要したのである。それは、「人知では理解できない (inscrutable)」理不尽な神に対しての赦しであったのだ。

1891年9月28日に生涯を閉じたメルヴィルの葬儀は、近親者他、数人の参列者で牧師の式辞もごく短いものであったらしい。New-York Daily Tribune紙の死亡記事も1847年出版の『タイピー』で「かなりの名声[considerable fame]<sup>18)</sup>を得たが、その後は鳴かず飛ばずで云々、と言った具合の簡単なものである。「存在への勇気」についてパウル・ティリッヒは言う。それは「受容されるべきでないにもかかわらずなお受容されたものとして自己自身を受容する勇気である」<sup>19)</sup>と。少年水兵ビリー・バッドを死刑に処したヴェア艦長の苦悩と愛情と決断、そして、少年水兵の寛容と静謐とを描き上げようとしていたメルヴィルは、死亡記事を書いた記者の伺い知ることのない、ティリッヒのいう「存在への勇気」を内に秘めて人生を終えたのであろう。

〔注〕

- 1) 谷本泰三「『モウビ・ディック』に観る差別・被差別」『文学における差別』桃山学院大学総合研究所，2001。
- 2) Melville, Herman. *Moby-Dick: or The Whale* (Evanston and Chicago: Northwestern UP and Newberry Library) 1988. *Moby-Dick*からの引用はこの版によることとし、日本語訳を試みた。必用に応じて原文を添えた。
- 3) 聖書からの引用は「新共同訳」による。
- 4) アルバート・ノーラン『キリスト教以前のイエス』篠崎榮訳，新世社，1996，58-63。
- 5) ユルゲン・モルトマン「世界の終わりー世界の滅亡か，新しい世界の創造か」武田武長訳『現代の終末論とフェミニズム』新教出版社，1997，27。
- 6) Chase, Richard. *Herman Melville: A Critical Study* (New York: Macmillan, 1949) 199.
- 7) Mansfield, Luther S. and Howard P. Vincent. "Explanatory Notes." *Moby-Dick*

- (New York: Hendricks House) 1952. 830-831.
- 8) ゲルハルト・フォン・ラート『旧約聖書注解 創世記』山我哲雄訳 ATD・NTD聖書注解刊行会, 1993. 188.
- 9) 大木英夫「現代世界の神話的考察」『終末論的考察』中央公論社, 1970. 37.
- 10) 大野恵正『新共同訳旧約聖書略解』木田献一監修 日本基督教団出版局。37。
- 11) ラート 198.
- 12) ラート 199.
- 13) Strauss, Leo. “The Beginning of the Bible and Its Greek Counterparts” *Modern Critical Interpretations: Genesis*. ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1986) 33-34.
- 14) Vincent, Howard P. *The Trying-Out of Moby-Dick* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP, 1949) 373-374.
- 15) 洪水神話の現代的意義については大木英夫（「現代世界の神話的考察」『終末論的考察』中央公論社, 1970. 27-66.）から示唆を受けた。
- 16) Coleridge, Samuel Taylor. “The Rime of the Ancient Mariner” *English Literature and its Backgrounds* (New York: The Dryden Press, 1950) 624.
- 17) 谷本泰三「ハーマン・メルヴィルと恩寵」『桃山学院大学キリスト教論集』35号, 1999。
- 18) Leyda, Jay. *The Melville Log* (New York: Gordian Press, 1969) 837.
- 19) パウル・ティリッヒ『存在への勇気』谷口美智雄訳, 新教出版社, 1969, 221-2。

## “In Nomine Diaboli” Ahab’s Armageddon

Taizo TANIMOTO

This paper seeks to identify Melville’s Ahab with a super hero who wages the war of Armageddon against the White Whale, a personified God which is, to Ahab, “an inscrutable malice.” Ahab tries to remove the ultimate source of all evil that humanity suffers—inhuman activities on earth, social, economical, cultural, and what not. He has to right the wrong of the world, or the whole structure of the moral and the spiritual universe created by God. Most of all, death is to be subdued. He goes out to the whaling grounds to kill death by death.

One of the owners of the *Pequod* is aptly calls the hero in an oxymoron “a grand, ungodly, god-like man.” The whole story of hunting the White Whale symbolically depicts the tragic effort of the quasi-messiah. The self-appointed messiah claims subjective superiority over objective facts, thus committing the sin of self-deification.

To be sure, he is not without sympathy toward the weak. He often reveals the warmth of his heart. Yet humanity in Ahab is given completely to his furious indignation. The book as a whole is “a wicked book,” and its tone dark and gloomy with the scene of the horrible destruction by the Flood.

The story, however, does not end there: there is Ishmael rising from the depths of the Deluge. He followed coffins before he went to sea; he now comes back to a coffin for life, floating on it “in the great shroud of the sea as it rolled five thousand years ago.” The reader remembers early in his tale Ishmael saying of the ocean: “Noah’s flood is not yet subsided; two thirds of the fair world it yet covers.” Noah survived the Flood, the total destruction



of civilization; so does Ishmael, the total destruction of the *Pequod*, the nineteenth-century counterpart of the Tower of Babel.

Ishmael is back. “It so chanced,” says Ishmael, the survivor. It is to tell the story of Ahab’s battle. But he, in telling the story, enacts the role of a prophet, the mission ordained by the author. What is more, Ishmael’s “chance” was to make Melville perform later in his work *Billy Budd* a role of a priest. He celebrates a Eucharist as his narrator unfolds the mysterious story of the death of an angelic young sailor, Billy Budd. When Melville was writing the story of Ahabean theodicy, he was not ready to dramatize soteriology couched in his story of *Billy Budd*. The old Ishmael telling the story of *Moby-Dick* foreshadows the tranquility and peace which prevailed at the end of the author’s life-long struggle with God.